

吉村誠司 日本画展

—浮遊—

- 東京展
【会期】 6月24日(水)～6月29日(月)
【会場】 日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊
中央区日本橋室町1-4-1
☎03(3241)3311
- 福岡展
【会期】 7月22日(水)～7月27日(月)
【会場】 福岡三越 9階 岩田屋三越美術画廊
福岡市中央区天神2-1-1
☎092(724)3111

よしむら・せいじ

1960年福岡県生まれ。85年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業、サロン・ド・プランタン賞。86年東京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞、春の院展初入選。87年院展初入選。88年有芽の会法務大臣賞。90年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程満期修了。96年院展日本美術院賞・大観賞(98年)。2000年春の足立美術館賞(05年)、日本美術院同人推荐。07年院展文部科学大臣賞。10年院展内閣総理大臣賞。11年院展足立美術館賞、共同通信社配信「随想」挿絵担当。現在日本美術院同人、東京藝術大学教授。



撮影：山口大志



「龍図」2020年 100号



「虎図」2020年 100号



「暖流」2020年 40号



「古代魚」SM



「眺望」2020年 SM



「爽風」2020年 100×100cm

東京藝術大学の教授として後進の指導をしながら、院展を中心に発表を続ける吉村誠司。同店初となる個展を開催するにあたって、カタログに寄せた言葉を抜粋する。

「タイトル『浮遊』には、『漠然としながらも、意思がはっきりしている』『漂いながらも、行き先は決まっている』という私の制作の仕方、想いを込めております」

絵を描くことについて、真摯に追求し続ける吉村ならではの言葉である。左頁に掲出した大作の龍虎図については、「龍虎図の基本にあるのは狩野派です。『狩野派再現』という企画に参加して、日本画の源流は『狩野派』の描き方＝様式にあると思うようになりました。平面的な江戸時代の狩野派作品ではなく、空間を表現した、現代の狩野派を目指しました。龍が太陽をもって天に昇っていく、一日の幕開けです。竹林の中、龍と向かい合って崖上から見下ろす虎。虎の顔、岩や竹の描き方も狩野派に学んでいます」と書いている。自らの画業の源流をつかむことで新たな画境を開こうとする姿勢を、日本画家として、また指導者としても大切にしているといえる。

約30点を出品する同展では、画家の持つ世界観の幅広さを目の当たりにすることができる。それは長い年月を乗り越え脈々と受け継がれてきた日本画の現在を確かに示す場ともなるだろう。

(編集部)